

# ろくおん 通信

発行日：1995年12月15日

## No. 78号

発行：盲人福祉文化センター録音製作係

「音声訳」を考える（第31回）

処理を考える（第6回）

### 漢字の処理



「漢字の処理」と言っても、単に同音異義語だけとは限りません。補足しなければならない場合はいろいろあります。それぞれのケースによって補足する理由も異なりますから、それに合った補足をすることが肝腎になります。つまり、どういう時に、どんな理由で補足（或いは処理）をするかによって処理の仕方がそれぞれ違ってくるといことです。

よく見られるのが、「墨字の内容をできる限り正しく伝える為に補足する」ということと「墨字の内容が難しいから補足する」ということとの混同です。「その語句が難しいからわからないだろう」というのは、視覚障害者であろうと晴眼者であろうと条件的にはあまりわかりません。こうしたケースで補足をするわけではありません。その語句が難しいか、難しくないかは個人差がありすぎて基準がありません。要は「墨字が見えないために正しく伝わらない時」、つまり、晴眼者であれば誰もがわかる文章を、そのまま音声化しただけでは、なんのことだかわからなかったり、あるいは別の意味に取ったりして著者の文意が正しく伝わらない時に補足をするわけです。

そうしたケースで、音声訳者がいかに適切な言葉を使って補足をしていくかが、漢字を補足していく時のポイントです。補足する必要がある程度分かっていても、どんな言葉を使うかは大変苦勞します。内容を混乱させず、よりわかりやすく補足するにはそれなりの研究が必要です。適切でない補足はかえって文章を混乱させるもとになります。

まずどんな時に補足が必要かを考えてみると、

1. **同音異義語**： 他にも同音異義語があり、複数の内容に解釈され正しく伝わらない。  
(今回の練習問題にあり)

補足のポイント→ 「どちらの言葉かが分かるように」補足する。

2. **音読みと訓読み**： 同じ漢字だが前後でそれぞれ違う読み方をするため、同一であることが分からない。文章の混乱は起こらないが、著者の意図が正確に伝わらない。  
(今回の練習問題にあり)

補足のポイント→ 同じ語句であることを補足する。

3. **漢字自体を問題にしている**： 形(漢字)が問題になっているが、見えている人にはわかるが、本文中にその説明がないので補足しないとわからない。

補足のポイント→ 何を問題にしているかをはっきりさせ、その足りない部分を補足する。問題にしているケースは様々ですから充分検討が必要。  
(前回の練習問題にあり)

4. **造語・固有名詞など**： 造語は辞書にはない語句なので、漢字を見ている人は使われている意味がわかるが、音声だけでは著者の意図が伝わらない。また、固有名詞などで使われている漢字を補足した方がイメージが深まる場合は補足をする。

補足のポイント→ 使われている漢字を説明することで、そのことばの意味やイメージを深める。

以上の4つについて、補足が必要になります。つまり漢字を補足する時とは、

- ①同じ読みで、違う意味があれこれあってわからない時
- ②違う読みでも同じ語句であることがわからない時
- ③漢字の形が見えないのでわからない時
- ④使われている漢字がわからないのでわからない時

といえます。それぞれのケースで処理方法は違いますので、最も相応しい処理を考えなくてはなりません。

具体的に処理の方法をあげるとすれば、

- 処理1 その漢字を含む他の熟語を使って補足する
- 処理2 訓読みをしてその語句をわからせる
- 処理3 意味を使ってその語句をわからせる
- 処理4 偏や作り、冠、足などで説明する

処理5 その語句を含む別の言葉で補足をする

処理6 違う読みでも同じ語句であることを補足する

処理7 漢字の形を問題にしている時、図形と同じと考えて必要な部分のみ補足する

などが考えられますが、どの方法を使うかはその文章の中での取り上げ方によって様々です。処理の方法にあるから、どれを使っても良いというものでは決してありません。また、補足の仕方もしろいろな方法がありますので、その文章の中で工夫していくことが大切です。

今回の練習問題の中にも漢字の処理の問題が結構含まれています。どこが問題か、どこでどのように補足をするかよく研究してみましょう。

つづく

## 前回練習問題のポイント

【例文1】 太陽と大陽の説明が必要です。

【例文2】 「落羽松」の漢字の説明をすることでイメージが深まりそうです。

【例文3】 「じねん」は漢字で書くと「自然」と書くことを説明する必要があります。

『・・・自然観そのものがじねん、シゼンではなく・・・』と読むとわかりません。

## 練習問題

【例文1】

病気と仲良く生きる

一八八二年に、ドイツの細菌学者のロベルト・コッホ（一九一〇年五月二十七日没）は結核菌を発見した。つづいて彼は翌八三年にコレラ菌を発見。医学の歴史において、この発見の意義は大きい。なぜなら、細菌という敵が見つかったのだから、医学はこの敵をやっつければいいわけだ。かくて、西洋近代の医学は、

——闘病の思想——

を確立した。病気を敵と見なし、その敵と闘うことが医療の基本とされたので



ある。しかし、仏教の考え方はそれとは違う。

仏教においては、病気と闘うのではなく、むしろ病気を受容し、病気と共存することが考えられている。

たとえば、癌である。

西洋近代医学の闘病の思想においては、癌と徹底的に闘う姿勢が賞賛される。

だが、困ったことに、癌細胞というものは人間の身体の中であって他の正常細胞とは別個に異常に増殖するものである。そして、この癌細胞をやっつけようとするれば、どうしても周囲の正常細胞までもやっつけてしまうことになる。その結果、頭髪が抜け落ち、気力が減退する。見るも無惨な姿になってしまう。これは闘病の思想が持っている自己矛盾である。闘病の思想に立つかぎり、このような矛盾はどうしても避けられないのである。

これに対して仏教は、むしろ癌を受容し、癌と共存して生きる生き方を教えている。わたしはそのように考えている。

もともと仏教においては、生・老・病・死を「苦」と捉えている。「苦」というのは、自分の思い通りにならないことである。思い通りにならないものを、なんとかして自分の思い通りにしようとするところから「苦」が生ずる。それは馬鹿げたことである。だから、仏教では、思い通りにならないものを、なんとかして自分の思い通りにしようとするところから「苦」が生ずる。それは馬鹿げたことである。だから、仏教では、思い通りにならないものを、これは思い通りにならないことだと諦めるように……と教えているのだ。あの明らめが、「諦<sup>ない</sup>」である。つまり、「諦」とは断念することではなしに、真実を明らめることなのだ。

したがって、われわれの病気も老いることも、われわれにはどうすることもできないのだ。だから、病気になれば、われわれはその病気を受容し、病気と仲良く生きればよい。仏教はそのように教えている。

## 【例2】

「ただし老化した、これは感じる。もの忘れなんかしょっ中で、この二、三年とみにはなはだしい。それから妙なことばかり気になる。注連縄」というのがあるだろう、神社やなんかの。あれがわからない。佐久間象山は“ぞうざん”か“しょうざん”か。大塔宮という人がいたが、あれは“だいたうのみや”か“おおとうのみや”か」

-----うちの親父は「ぞうざん」派で「しょうざん」派の母親と喧嘩していたことがあります。昭和三十年代ののどかな風景です。

「象山は“しょうざん”でね。象山自身が英字でサインしたのものが見つかって、“S・サクマ”とあった。大塔宮は“おおとうのみや”。こちらは“おお”と読める別の漢字をあてた文書が見つかったから、そうなったわけだけれども、まあ、そういうどうでもいいことがとても気にかかりだしたのはあきらかに老化のしるしだ。ぼくが近くを散歩してきたあとで、近所の奥さんにうちの（奥さん）がいわれるそう。ご挨拶したのにお宅のご主人は返事もされない、難しい顔をして考えごとをされていた、さすがに小説家はたいへんな仕事なんですね、という。いやなに、こちらはほんやりして気づかなかっただけでね。考えていることといえば、さっきいったような妙な、つまらないことばかり。とてもひとに頭の中は見せられない」

-----『太平記』かなにかに護良親王という人がいるでしょう。あれは「もりながしんのう」ですか、「もりよししんのう」ですか。皇太后は良子さんですよ。ぼくは森永キャラメルみたいだから「もりながしんのう」のほうがいとずっと思っていました。・・・

### 【例3】

この著は、「思うままに」という題名のもとに、平成五年七月から平成六年十二月まで週一回東京新聞及び中日新聞に連載したものを集めたものである。先の『世界と人間』に次いで第二巻めであるが、この表題の『自然と人生——思うままに』というの、内容からみて編集部が選んだ題名であり、私も賛同したものである。

『自然と人生』というの、徳富蘆花に同名の書があり、私も若いときに蘆花の『自然と人生』を読んだことがあるが、それはやや感傷的な自然の観照と人生の孤独の賛美の書であったように思われる。私には蘆花のような感傷あるいは観照の精神はないが、このエッセーのいたるところで自然に対するいささか観念的すぎる賛美があり、またいろいろな人間について語っているので、『自然と人生』という題名でもさしつかえないと思った。

蘆花には蘆花の「自然と人生」があるように、私には私の「自然と人生」があるのである。かつて私は福沢諭吉の『学問のすすめ』と同じ題名の書を書き、百

年前の論旨の学問と全く違った学問のあり方について語ったが、「自然と人生」も蘆花の時代と現在とは全く違った様相を呈しているように思われる。それでこの本も、現代における私によって語られた「自然と人生」であるといつてさしつかえない。

東京新聞と中日新聞の連載はまだ続けているが、このエッセーが齢とともに深い省察となり、モンテーニュの『エッセー』やパスカルの『パンセ』の如きものとなってほしいと思う。

一九九五年一月

梅原猛

【例文4】

更年期のことを英語でクリマクテリック・ピリオドという。ピリオドとは終止符「。」の意味である。平均寿命が五〇歳くらいだった時代には、閉経、「。」は本当に人生の終わりだったのだろうけれども、人生八〇年の時代では、「。」の次ぎにまた新しい文章が書かれることになる。お芝居なら、第二幕と第三幕との幕間に当たる。舞台装置の入れ替えなどで、ゴタゴタしてあわただしいときだ。

第1幕と第二幕の幕間はいうまでもなく思春期だ。

ただこのピリオドは、人によって「。」だったり「。。。。。。」だったりする。つまり更年期は短い人と長い人と個人差がある。新しい文章が綴られるまでの準備期間だからだ。

二通りの読みがあって意味が異なるもの・・・(38)

行き方	キカタ 行く順序。行く方法。	平地	ヘイ 平らな地面。
	キカタ 行った方角。ゆくえ		ヒラジ 平織りに同じ。
面子	メコ 子供の玩具	立礼	リツレイ 起立して敬礼すること
	メンツ 面目、体面。		リュウレイ 茶の湯で椅子と卓を用いて茶をたてる点前。
六合	ロクゴウ	横手	ヨコテ 横に当たる方向。
	リクゴウ 天地と四方、宇宙全体		ヨコテ 横にした手。またそうした手を打ち合わせる。

## きれいに録音するために（第19回）

## 録音中はスピーカーの音量は0（OFF）に絞る

カセットデッキで録音する時はヘッドフォンを使うようすすめています、中にはスピーカーを使って録音される方もあるようです。その場合、録音時に、スピーカーのボリュームを絞らず、そのまま録音しようとする「ピー」とか「キーン」といった、気持ちの悪い雑音を発生させることがあります。これは、マイクとスピーカーが向かいあう形になった時に発生するハウリングと言われる現象です。

ハウリングが起こってもスピーカーの音量を小さくすると収まりますので、スピーカーのボリュームを0に絞らず、そのまま録音している方もあるようです。確かに録音はできますが、その場合、音声記者自身の声とスピーカーから出る声の両方とも録音されてしまいます。この状態で録音された声を聞くとなんとなくもった感じになり、声にシャープさがなくなります。丁度反響音が強かったりすると、シャープさがなくなるのと似ています。

これを防ぐには録音ボタンを押す前に、スピーカーのボリュームを絞りこんで（OFFにして）から録音をします。しかし、スピーカーを、一旦、OFFにしてから録音ボタンを操作するのは操作が複雑になることから、できるだけヘッドフォンを使って録音するようすすめているわけです。特に後追い録音の場合はヘッドフォンは欠かせません。ヘッドフォンから洩れる程度の音量（開放型であまり音量を上げ過ぎてもいけません）ではほとんど問題はありません。

しかし、録音機が2ヘッドではなく3ヘッドの場合はヘッドフォンの声は少し遅れて聞こえます。このヘッドフォンからもれた音が録音されると耳障りになりますから注意しましょう。その場合はボリュームは最小限にしておくか、録音中はヘッドフォンのボリュームを絞るようにすると良いでしょう。



つづく

## リクエスト図書一覧

以下のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。  
グループの方で引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。

- 『警視庁草紙 上・下』 山田風太郎著 <小説>
- 『幻燈辻馬車 上・下』 山田風太郎著 <小説>
- 『算命学中国占星術 第1巻～第9巻』
- 『狂信者』 (上・下) ハー・タラントラム著 <小説>
- 『仏陀再誕』 大川隆法著 <宗教>
- 『今度こそ、やせる! ダンベル・ダイエット』 鈴木正成著 <医学>
- 『宮沢賢治とでくのぼうの生き方』 桑原啓善著 <宗教>
- 『夢について行こう 女房は宇宙をめざした』 向井万起男著 <随筆>
- 『ホワイトアウト』 真保裕一著 <小説>
- 『愛・歌・心 歌手生活40周年記念島倉千代子大全集』 <詩歌>

引き受けて頂いたリクエスト原本	グループ
「テロリストの parasol」 「私というもののなりたち」 「心理学概論」 「龍の契り」 服部真澄著 「雷鳴の館」 ディーン・R. クーンツ著	みなわ えくてもあ えくてもあ えくてもあ えくてもあ



**編集後記** 先日、近点協の主催する「ボランティアの集い」で、近点協の録音図書製作委員会のメンバーがカセットデッキを使いながら録音技術の講習を行いました。講習終了後、同じ機械をもっておられる音訳者が「はじめて後追い録音の方法がわかりました」と述べておられました。後追い録音の方法はこの紙面でも何度か取り上げ、本人も読んでおられたようですが・・・文章で伝えることの難しさを痛感しています。

来年もどうぞよろしく。